

言葉と貨幣

大 熊 信 行

言葉と貨幣とは似たところがある。社會あつての言葉であり、社會あつての貨幣である。一つの言葉が通用する社會では丁度また一つの貨幣が通用することさへしばしばである。

言葉は萬人に通ずるものであり、貨幣も萬人に通ずるものである。言葉の使用と貨幣の使用とはよく似てゐる。いづれもその使用には時をえらみ、所をえらむ。言葉は自分のもののごとくで、すこしも自分のものではない。貨幣もおなじことである。それが自分のものだとおもつてゐるかぎり用をなさない。言葉も、貨幣も、自分の口から、手から、でていくときにだけ、一定の用をなす。

言葉と貨幣ほど純粹に社會的なものはこの世にない。この二つのものには個人的な何ものも附隨してゐない。さらにその用途の無限なることにおいて兩者は酷似してゐる。人間であつて言葉の使用法と貨幣の使用法の二つを知らないものもない。

たゞ貨幣はその量がふところにかぎられてゐるのがつねであるから、おのづから使用に制限をうけ、ひとびとはむやみな使ひ方を戒めざるをえない。これに反して言葉は無制限のものであり、何をいくらしゃべつても減るといふことがない。言葉が貨幣と大いに異なる點はこれであり、言葉の正しい使用が貨幣のそれよりもむしろずつと困難なゆゑである。

空手形といふことがある。手形は貨幣である。言葉の約束だけで實行のともなはないものを空手形とよぶことがある。あたかも言葉を貨幣にたとへたのであるが、このたとひが偶然でないことはすでに明瞭である。

貨幣に^{にせがね}贖金といふものあり、にせがねつかひは最も重く罰せられる。人間の言葉にもおそるべき贖金がある。人に言葉の贖金をつかませて恥ぢないものがある。ところで言葉のにせがねつかひが重刑に處せられないのは、すこしも罪がかるいからではない。——たゞ言葉が物質でないばかりに、どう手のつけやうもないのである。